



撮影:山田新治郎 (表紙、並びに当ページ)



時を超えて、文翔館の時計塔は今も正確な時を刻み続けている。その動力は電気ではなく、明治時代からの重りだ。5日に一度、専属の時計技師が塔に登り、手動で重りを巻き上げる。この伝統は、親から子へと二代にわたって受け継がれてきた。100年以上前の技術と、それを守り続ける人々の営みが、時計台の確かな鼓動を今に伝えている。

建築技術の粋を集めたもので、パンテオンなどローマ帝国の壮大な公共建築に通じる。県議会が開催されない時期には、コンサートや展示会、講演会といった県民の様々な行事やイベントに広く提供してきた。議場に立つと、白熱した議論とともに当時の人々の賑わいが聞こえてくるようだ。

一九七五年に県庁としての役目を終え、一九八四年に旧県庁舎と県会議事堂が国の重要文化財に指定される。後に、文翔館は一〇年の歳月と巨費を投じて一九九五年に復原工事が完了した。今、この建物は山形県郷土館として、訪れるすべての人々に大正浪漫という名の優雅な旅を提供している。

秋の夕刻、大きな広場にゆっくりと時間が流れている。正面には赤煉瓦と石貼りの建築が併む。ここは、「文化が翔ける」という願いを込めて名付けられた、山形県郷土館である文翔館。かつては県庁舎と県会議事堂であり、一九一六(大正五)年に竣工。英國の建築家ジョサイア・コンドルの教え子、田原新之助が英國近世復興様式を取り入れた莊厳な姿は、山形の近代化の象徴として今も威厳を放っている。その建設には、大火で庁舎を失った県民からの多額の寄付が充てられ、未来への希望が凝縮されている。

旧県庁舎の内部に足を踏み入れると、職人の魂が宿る精巧な漆喰彫刻が目に飛び込んでくる。戦時中の空襲に備え一度は取り壊され、中庭に捨てられた破片から復原された花と果物の繊細な装飾は、この建物の歴史を物語る。旧知事室の壁紙に描かれた下から上へと昇る藤は、「ますます栄えるように」という願いが込められた、秘められた上昇の物語だ。

旧県庁舎から渡り廊下を進んでいくと、とりわけ壯麗な姿を見せるのが旧県会議事堂だ。正面には古代ローマ建築を思わせる列柱があり、その内部は「トンネル・ヴォールト」と呼ばれる半円筒形の大空間が広がる。これは、当時の

文翔館

山形県山形市